

異分野融合、 実践と思想のあいだ。

京都大学
学際融合教育研究推進センター
准教授 宮野公樹

導入

自己紹介

学問論、大学論、政策哲学（かつて金属組織学、ナノテク、医工学。その生い立ちを少し）

総長補佐（松本前総長時代5年間）、文科省科学技術振興局学術調査官（4年間）

学際融合教育研究推進センター

分野横断的な新学術領域と人材の創出に関わる全学的取り組み推進

組織横串のかつゲリ拉的に全学的取り組み推進

定量目的化困難な“気風”や“土壌”作りを担う基盤組織

ありがたいことに視察や新聞記事多数

この場に立つ 想いとして・・・

僕なりの学問論、という学問がこれ（今日の話）なんです。

コーディネーションしてる気は無い

僕の学問ははいていうなら下記の間いから

研究のための研究という批判文の対極は実用ではない

小難しさは同じでも、生き続けるものとそうでないもの

常識を喪失させてどうする？ 本来、その逆でしょ。

学者OBOGがよくいうが、それはずいぶんw

●学問が生活世界から離れたといつまで言わせるのか？

●最新の学問はつまらないといつまで言わせるのか？

●哲学が基礎論であり学術間の壁を破るというのなら、なぜそれをしないのか？

してはいるが目に見えにくいだけか

ちなみに大学論、学問論において新規性、独自性を主張する気は無いです。ドイツ概念論あたり、江戸後期の学者あたりに畏敬

我が学問の実践

学際ユニット

教員のサークル活動。現在33ユニット。増加傾向。人事や単位認定の支援。拘束しないが金もださないw

もっと事務的な支援をしてあげたい

定例開催異分野交流会

いつもの時間いつもの場所で。4年目。10人→40人に

皮肉にも京大教員が少ない：笑

学際研究着想コンテスト

異分野でチームを組んで応募。賞金100万ぽっちだがそこにあるからくり。研鑽の場

もっと応募が欲しい。学外からも。審査が難しいがそれはそれでよい。

WS支援事業

「いつかこのネタでワイワイやってみたかった」という研究者に金と知恵

自由にやりすぎて、管理されるようになってきた・・・泣

包括的企業連携

個別技術ではなく、新たな社会的価値創出を。いろんな分野からなる学者100人ワールドカフェなど。

企業とやるのは大変！先生たちも忙しいからメンバーが固定化しがち

学術分野ごとの文化比較大調査

異分野融合とかいうけど、まるでお互いのプロフィールすら知らないのにお見合い結婚させられて強制的に同居させられるようなもの。それで愛は生まれるか？

まだまだ回答数が少ない！何卒、ご協力を～！

学生と教員の縦横無尽「問答」サイト

熱心な学生はいろんな先生に質問したい。でも怖い。そこで、センターが仲介。先生とのマッチングの前にならず僕と会うのがミソ

教員3000名のうちせめて300人は登録してほしい！

その他

学融合フェロー制度、哲学コーチング、駆け込み寺、京大100人論文

なぜうまくまわっているのか

一人だから自己責任ですべてイケる：笑 理解ありかつ信頼置けるセンター長。

確固たる理念、理論があるからと思っています

異分野融合の思想

なぜうまくまわっているのか

一人だから自己責任ですべていける：笑 信じることで責任とれること。理解と信頼あるセンター長。

理念、理論があるからと思っています。「お仕事はコーディネーションですね」といわれるとイラッとする：笑

「わたし、もともと〇〇分野でして・・・」とうれしげになるような異分野融合を良しとする筋書きに支配されている事実。これはどこからきている？

そもそもなぜ異分野融合やら対話やらと言われているかの今日の理解

既存の伝統学問では社会課題に対応できないという理由から

学際研究の芽 1970年代から問題意識があった。米国では

日本ではいったん燃えて、そして消えたw

学術領域の細分化 細分化というより歴史としての学問そのもの

哲学、天文学からいまで

なぜ細分化になるの？
その正しい認識が重要

専門主義：厳密解を得ようとするれば環境条件が狭められる

論文主義：オリジナリティーをもとめる

相対主義：相互検証不能ならますます

がんばるほどディスコミュニケーションが進む構造をつくってしまっている。

上記をふまえてこそやっと「今日の異分野融合」を語れる。世間的に言われている学際、または異分野融合とは。

政策的と学問的なものの違い

連携は「協力」、融合は「対立」

そういった意味で、現在のほぼすべての学問は「派生物」？

では、融合はどこにある？それは個人！ここを起点に理解の体系構築を試みる

今日の異分野融合は、起点である「人」を無視している。個々人の構えを。なのに、制度や環境（場）、成果物の話をしているからうまくいくはずがない

ではどのような「構え」が必要か？

点と形。真実は多面的 自分は狭いという自覚

論文生産ではなく真理追究のはず 学問は一つ

結局、異分野融合（学際）を語るの は学問を語るのと同値

ことさら学際や異分野融合を騒ぐのは、本来の学問から離れている証拠

研究者でなく学者であれ。あろうとあれ。 しかし、今日は「学問」をしづらくなっている

では「学問」とは何か？

真っ正面からの 学問論,大学論

嘆き

- ①「形式化」基だしい
- ②「科学化」基だしい
- ③「個人化」基だしい

- ・査読システムの弊害、業績主義の強化、前例主義、真なる学問の形とは？
- ・要素還元限界は？ データってそんなに真？ 科学手法には領域がある
- ・真実追求はコミュニティーの仕事なのでは？本音で言い合えないこの状況・・・

学者、学問がいわゆる近代主義（個人主義、能力主義、効率主義、専門主義、科学主義など）に飲み込まれてどうする・・・？

かつて学問は「言葉（精神）」が対象。今、大部分は「事実」が対象。説明（解説）ばかりで認識はない。故に「よく生きる」に資さない

戒め

●企業に金とゆとりさえあればやっている研究をしてはいないか？

●個人的趣味とどう違うのか？

●どんな世を（または未来を）信じているのか？

おわりに

信じてるから言う

僕だってイヤな目にも遭ってます